

# 日々のみことば

2022年 11月

「あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたからです。」(ペトロの手紙Ⅰ 3章9節)



仙台南光沢教会

## 私たちの目指す教会

### 「キリストがあらわされる教会」

#### 一. (礼拝) 『イエスは主』と告白する教会」

(ピリピ 2 : 10、11)

私たちは、「ここに主がおられる」と信じて、御前にひれ伏す礼拝をささげます。

#### 二. (宣教) 「キリストの香りを放つ教会」

(第2コリント 2 : 15)

私たちは、遣わされた場所で、主と人に仕えて生きることを目指します。

#### 三. (交わり) 「主を中心とした交わりに生きる教会」

(マタイ 18 : 20)

私たちは、福音の喜びを互いに分かち合い、祈り合うことを大切にします。

\*新しい会堂において、「私たちの目指す教会」が実現していくように祈りましょう。

## 神の民を裁く主

アモス書2章

主はこう言われる、「イスラエルの三つのとが、四つのとがのために、わたしはこれを罰してゆるさない。(6)

前の章の3節から一つの定型句を用いて、ダマスコ、ガザ、ツロ、エドム、アンモン、モアブなどの諸外国に対する神の審きが語られてきました。

その矛先はついに、ユダとイスラエルに向けられました。預言を語っているアモスの直接の聴衆であるイスラエルの人々は、最初のうちは自分たちに敵対する諸外国に神の審きが下るのを心地よい思いで聞いていたでしょう。ところが、その神の厳しい審判の鉄槌は彼ら自身の上に振り下ろされることになったのです。アモスの預言は最初から神の民イスラエルに対してこそ向けられていたものでした。それゆえ、他の諸国に対する審きの言葉に比べると、イスラエルに対する言葉はずっと詳細なものになっています。神の民は神によつて特別に選ばれ、他のどの民族よりも多くの恵みを与えられているからこそ、それだけ多くの責任と使命とを負っています。けれどもイスラエルは偶像礼拝に染まり、選ばれた民としての聖さを失っていました。そのため、どの民族よりも厳しく主に裁かれることになるのです。

わたしたちは周りを見まわして、「これぐらいは誰でもやっている」などと言つて自らの罪を軽く見積もつてはなりません。わたしたちは限らない主の恵みを知っている者たちです。神の民として、主の恵みに応えて生きるわたしたちでありたいと願います。

## 悔い改めの勧め

ヨエル書2章

今からでも、あなたがたは心をつくし、断食と嘆きと、悲しみとをもつてわたしに帰れ。あなたがたは衣服ではなく、心を裂け。(12、13)

前の章で、切迫している国家の滅亡に対して警告を与えたヨエルでしたが、それは時間の問題であつて、迫り来る敵の攻撃から逃れる道はほとんどないように思われました。

けれどもヨエルは、主の言葉に唯一の希望を見出しました。それは民が自分たちの罪を素直に認めて、主のもとに立ち帰ることでした。悔い改めこそ、近づく破滅から逃れる唯一の道だったのです。主は民に語られました。「今からでも、あなたがたは心をつくし、断食と嘆きと、悲しみとをもつてわたしに帰れ」。もう手遅れだと諦めてしまふような者たちに、「今からでも」と主は告げられました。悔い改めることにおいて遅すぎることはありません。気がついたその時、主のもとに立ち帰るべきなのです。しかも主は「あなたがたは衣服ではなく、心を裂け」と命じられました。形ばかりで内実の伴わない悔い改めではなく、心の底からの真実な悔い改めを求められました。ヨエルは民に向かつて勧めました。「あなたがたの神、主に帰れ。主は恵みあり、あわれみあり、怒ることがおそく、いつくしみが豊かで、災を思いかえされるからである」(13)。主の赦しがあるからこそ、悔い改めることができるのです。「今からでも」という主の言葉は、何とありがたいことでしょう。わたしたちは自ら諦めてしまうことなく、待つていてくださる主のもとに今帰ろうではありませんか。

そこであなたがたは知るであろう、わたしはあなたがたの神、主であつて、わが聖なる山シオンに住むことを。エルサレムは聖所となり、他国人は重ねてその中を通ることがない。(17)

この章は「主の日」を遠い未来に訪れる事柄として受け止め、そこでなされる神の審判と神を信じる民に注がれる祝福が語られています。

「主の日」は、神に背き続ける者たちにとつてはその罪が最終的に裁かれる日である一方、神の民にとつては祝福に満ちた回復が与えられる日です。神の審判がなされるそのとき、人々は主こそ神であることを知るようになると言われています。主は神を信じる者たちにとつての避け所となり、とりでとなつてくださいます。そればかりか、主は彼らの中に住まわれるようになると。神の民とは、神を自分たちの内に住んでくださるという約束は民にとつて最高の祝福でした。キリスト教会は、救い主キリストの到来によつて主の日の祝福がすでに始まっていると理解しました。主イエスの贖いによつて、その約束がすでに成就しているのです。わたしたちは主が内に住んでおられる聖所とされているのです(第一コリント六19)。

わたしたちキリスト者は、世の終わりの日における祝福を先取りするようにしてこの世に生きる者たちです。主の日の祝福はすでに始まっているのです。主イエスをわたしたちの存在の中心にお迎えし、聖霊の宮としての光栄ある歩みを続けたいと願います。

## 繁栄の中の預言

アモス書1章

彼は言った、「主はシオンからほえ、エルサレムから声を出される。牧者の牧場は嘆き、カルメルの頂は枯れる」。(2)

アモスは職業的な預言者ではなく、羊を牧する一信徒でありましたが、神によつて特別に選ばれて神の言葉を告げる働きを与えられました。彼は南王国ユダの人でしたが、北王国イスラエルに対してその滅亡が近づいていることを告げる働きを担いました。

彼が預言した時代は、南王国ユダと北王国イスラエルの両国とも繁栄と平和を享受していた時期でした。そのように人々が満ち足りていた時代に、アモスは主の審きの声を告げたのです。「牧者の牧場は嘆き、カルメルの頂は枯れる」。南にある牧場では豊かな草原に羊たちがたわむれ、北にあるカルメル山は緑に覆われていました。ところが、その牧場は嘆きの場所となり、カルメルの頂きは枯れ果てると預言したのです。繁栄と平和を楽しんでいた当時の人々にとり、アモスの言葉は到底受け入れられるものではありませんでした。アモスは神の言葉に素直に耳を傾けようとはしない人々に対して、厳しい神の審きの言葉を語らなければなりませんでした。人々にどう受け入れられるかではなく、神がどのように語られたかを第一としていたからこそ、この働きを続けることができたのです。

この世にあつて預言者としての働きを担う教会は、たとえ時代に逆行するようであつても神の言葉をストレートに語る責任があることを心に刻みたいものです。

## 主を求めて生きよ

アモス書5章

あなたがたはわたしを求めよ、そして生きよ。ベテルを求めるな、ギルガルに行くな。ベエルシバにおもむくな。ギルガルは必ず捕えられて行き、ベテルは無に帰するからである。(4、5)

アモスはイスラエルの滅びを、結婚を前にして死んだ乙女にたとえて悲しみの歌を歌います。その聴衆は喜びをもって礼拝に集まってきた人々でした。

元氣な人々に向かつて、「あなたがたはもはや死んでいるようなものだ」というのです。さらに主は語りかけます。「あなたがたはわたしを求めよ、そして生きよ」と。礼拝者たちは、自分たちは主を求めて礼拝し、それによって生かされていると思っていました。ところが神の目から見れば、彼らの礼拝は形ばかりで内実を失い、靈的には死んでいるということです。ご自身を求めるように告げられた主は、「ベテルを求めるな、ギルガルに行くな。ベエルシバにおもむくな」と命じられました。それらはイスラエルの民にとつては過去に大きな恵みが注がれた聖所であり、人々は熱心にそこを訪れて犠牲をささげていました。けれども今、主はそのような過去の恵みに固執し、それによって命を得ようとするのではなく、今ここに生きておられる主を求めるようにと勧められたのです。どこで礼拝するかが重要なのではなく、今ここに生きて働いておられる神に出会うことが、神の民が生かされる道なのです。

わたしたちの毎週の礼拝が形ばかりのものとなることのないように、今も生きておられる主と確かに出会い、その主によって生かされる礼拝をささげたいものです。

## 主が語られた

アモス書3章

ししがほえる、だれが恐れないでいられよう。主なる神が語られる、だれが預言しないでいられよう。(8)

アモスは職業的な預言者ではなく、もともとは一介の羊飼いに過ぎませんでした。それゆえイスラエルの民に向かつて神の審きを語ったとき、「何の権威をもってあなたはそのようなことを語るのか?」というような非難の声が上がったのでしよう。

そこでアモスは、彼がなにゆえに主の言葉を語るのかを明らかにします。彼はまず幾つかの例をあげて原因と結果の関係を語ります。二人が一緒に歩くのは彼らが約束したからであり、林の中で獅子が吠えるのは獲物を得たからである。これらを聞いていた聴衆は原因と結果の当然のつながりに何の疑問もなく承認したことでしょう。そこでアモスは彼が最も語りたかったことを告げます。「主なる神が語られる、だれが預言しないでいられよう」と。アモスが預言の言葉を語るのには、主なる神が彼に語られたからであるということです。神の力ある言葉を聞かされたアモスは、黙っていることなど出来なくなつたということです。アモスはそれほどまで真剣に神の言葉に聞き、その力ある言葉に全く捉えられてしまつていたのです。それゆえ、アモスはたとえ禁じられても、預言しないではいられなくなつたのです。

わたしたちが他の人々に福音の言葉を語るのには、力ある主の言葉に捕らえられるからです。主の恵み豊かな言葉がわたしたちを動かすほどに心の奥深くに届きますように。

## 孤独に沈むとき

詩篇142篇

あなたはわが避け所、生ける者の地でわたしの受くべき分です。どうか、わが叫びにみこころをとめてください。(5、6)

表題に「ダビデがほら穴にいた時に」とあるように、この詩はダビデが敵に負われ、窮地に陥っていた時のことを背景にして書かれたものと思われまます。

詩人にとつて最も大きな心の痛みは、自分を顧みてくれる人が誰もいないということでした。「わたしは右の方に目を注いで見回したが、わたしに心をとめる者はひとりもありません。わたしには避け所がなく、わたしをかえりみる人はありません」(4)。どんな人も誰か自分に関心を持つてくれる人を必要とします。人は完全な孤独に置かれては生きていくことが出来なくなりまます。このとき、詩人は神に向かつて叫びまます。「どうか、わが叫びにみこころをとめてください」。誰もわたしに心をとめてはくれなくても、あなただけはわたしに心をとめてくださいますよね、と言っているのです。ここに詩人の救いがありました。誰からも顧みられず、頼るべき人がいないときも、神は避け所となつてくださったのです。詩人は神こそ避け所であり、常に顧みてくださるお方であることを発見しました。このお方を天に持つ者たちは、たとえどんな孤独に置かれようとも、絶望することはありません。

わたしたちもダビデのように、「自分に心をとめてくれる人などいない」と嘆くことがあるでしょうか。常にわたしたちを顧みていてくださる主を仰ぐごうではありませんか。

## 神に会う備え

アモス書4章

それゆえイスラエルよ、わたしはこのようにあなたに行う。わたしはこれを行うゆえ、イスラエルよ、あなたの神に会う備えをせよ。(12)

古い聖所で行われる祭りに参加している人々にアモスは語りかけまます。神との出会いを樂しみ、宗教的な熱に酔いしれている人々に、「イスラエルよ、あなたの神に会う備えをせよ」というのです。それは彼らの礼拝の形骸化を鋭く突くアモスの言葉でした。

アモスはここで、「それでも、あなたがたはわたしに帰らなかつた」という主の言葉を五回も繰り返して、悔い改めようとしないう彼らの信仰を指摘まます。主はこれまで、飢饉、干ばつ、立ち枯れ、疫病などの災いを下して神のもとに立ち帰るようにと警告を与えてこられました。ところが、靈の感性がすっかり鈍つていたイスラエルの民は、それらが立ち帰りを求める主の語りかけであるとは気づかず、悔い改めの機会を逃してしまつたのです。それゆえ主は民に向かつてはつきりと告げまます。「イスラエルよ、あなたの神に会う備えをせよ」。最終的な主による審判が近づいているというのです。形ばかりの礼拝で満足し、本当の意味で主との出会いを経験していない人々に、主の前に立つ心備えをするように命じまます。神の恵みをないがしろにする者たちに対しては、神の厳しい審きが下ることになるからまます。

再臨の主を待ち望むわたしたちは、思慮深い乙女たちが油を用意しつづつ花婿を待つていたように、信仰の灯火を輝かせながら、主を待ち望む者たちでありたいと願ひまます。

## 回復の望み

アモス書9章

その日には、わたしはダビデの倒れた幕屋を興し、その破損を繕い、そのくずれた所を興し、これを昔の時のように建てる。(11)

アモス書はこれまでイスラエルの背信に対する神の厳しい審きの言葉が語られてきましたが、この11節以下、本書の最後はこれまでの著述とガラツと変わって、一度は滅ぼされたイスラエルがやがての日に回復されることが告げられています。

これまで、「主の日」を意味する「その日」という表現は、神の審判が下される日として使われてきました。しかしこの11節に出てくる「その日」は、背信の罪のゆえにイスラエルの民を滅ぼされる同じ主が、そのイスラエルを回復させてくださる日として言及されています。「その日には、わたしはダビデの倒れた幕屋を興し、その破損を繕い、そのくずれた所を興し、これを昔の時のように建てる」。アモスは、イスラエルの将来に滅びが待っていることをはっきりと見ていたのと同様に、そのさらに先にも主による回復があることをも望み見ていました。契約の神を信じる者は、たとえこの世がどんなに暗闇に覆われていたとしても、はるか彼方に主が与えてくださる希望の光を見出します。かすかな光であったとしても、主の約束に基づいた希望の光を見ているからこそ、厳しい審きを語ることができたのです。

絶望的な状況に立たされることがあつたとしても、わたしたちは主に向かって信仰の目を上げ、主が与えてくださる回復の約束に望みをおく者たちでありたいと願います。

## 偽りの平安を土台に

アモス書6章

カルネに渡つて見よ。そこから大ハマテに行き、またペリシテびとのガテに下つて見よ。彼らはこれらの国にまさっているか。彼らの土地はあなたがたの土地よりも大きいか。(2)

北王国イスラエル、南王国ユダがともに繁栄を誇っていた時代、アモスは両国の指導者たち、権力と勢力のゆえに安んじていた人々に神の審きを語ります。

「わざわざいなるかな、安らかにシオンにいる者、また安心してサマリヤの山にいる者」(1)とあるように、アモスが彼らの安心感に偽りの平安を土台にしていることを指摘します。彼らは自分たちの都が地形的にも軍事的にも難攻不落であると考え、現在の繁栄に酔いしれて安逸をむさぼっていました。彼らの贅沢な生活ぶりが4節から6節にかけて記されています。「鉢をもつて酒を飲み、いとも尊い油を身にぬり」(6)。そこでアモスは同じように繁栄する他国の都市の名前をあげ、「彼らはこれらの国にまさっているか。彼らの土地はあなたがたの土地よりも大きいか」と問いかけます。サマリヤの町は他の強大な都市に比べたら何ら勝るところなどないと告げます。もし彼らに勝るところがあるとするとするなら、それは真の神を信じているという一点でした。けれども彼らは、神に対する心からの信頼を失い、ただ自分たちの経済的・軍事的繁栄だけを頼りとし、偽りの平安を楽しんでいるのです。

わたしたちキリスト者の平安は自分たちの内にあるものではありません。一方的な主の恵みと慈しみにこそ、平安の根拠があるのです。

## 主に遣わされた預言者

アモス書7章

わたしは預言者でもなく、また預言者の子でもない。わたしは牧者である。……ところが主は……「行って、わが民イスラエルに預言せよ」と、主はわたしに言われた。(14、15)

預言者アモスの言葉を聞いたベテルの祭司アマジヤは、何とかしてアモスを追放しようと思ひます。聖所ベテルにおいて高い身分にあり、権勢と富を持つていたアマジヤは自分の地位と生活を脅かすアモスを野放しにしておいてはならないと考えたのです。

そこでアマジヤはアモスに対して、反逆罪で逮捕される前にユダに帰るように勧めます。アモスが収入を得たいがために預言活動をしているかのように見なしていたのです。これに対してアモスは、自分も父もその預言によつて収入を得る職業的預言者ではなく、もともと羊を飼う牧者であり、桑の木を作る農夫であると語ります。報酬が目当てで預言をしているのではないのです。彼が預言をするただ一つの理由は、「行って、わが民イスラエルに預言せよ」と主に命じられたからです。主の命令であるゆえ、たとえ人々から非難を受け、売国奴呼ばわりされたとしても、臆することなく主の言葉を語りました。彼は自分が主によつて遣わされた者であると信じていました。遣わしてくださった主への固い信頼があるからこそ、どんな中傷にも惑わされることなく、神の言葉を語り続けることができたのです。今も、神の言葉を語る者たちにとつて無くてならぬのは、自分を遣わしておられる主への確かな信頼でしょう。それがあからこそ、語り続けることができるのです。

## み言葉の飢饉

アモス書8章

見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る、それはパンのききんではない、水にかわくでもない、主の言葉を聞くことのききんである。(11)

幻を見せられたアモスは、「何を見るか」という問いに対して、「夏のくだもの(カイツ)」と答えます。それに応じて主は「わが民イスラエルの終わり(ケーツ)がきた」と言われました。これは一つの言葉遊びになっていて、夏の終わりにこれらの果物が収穫されるように、イスラエルの夏もほとんど終わりに近づき、ついに審きの日が来たことを告げられたのです。このような危機にあつてもなお人々は地上の生活のことばかりに心が奪われ、「新月はいつ過ぎ去るだろう、そうしたら、われわれは麦を売り出そう」(5)と論じていたのです。そこで主はやがてイスラエルを襲う飢饉について語ります。「見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る、それはパンのききんではない、水にかわくでもない、主の言葉を聞くことのききんである」。神の民イスラエルにとつての最大の苦しみは、命の源である神の言葉が聞けなくなることでした。信仰生活の基本原則の一つは、神が語られる言葉に聞き従うことにあります(申命記8:3)。神の言葉を失うとき、信仰者は死んだも同然となつてしまうのです。

物質的な繁栄に惑わされて、霊的にはいよいよやせ細つている今の時代にあつて、わたしたちは被造物として、命の源である神の言葉を慕い求めようではありませんか。

## 絶望の淵からの祈り

ヨナ書2章

しかしわたしは感謝の声をもって、あなたに犠牲をささげ、わたしの誓いをはたす。救は主にある。(9)

前の章の終わりで、船から海に投げ込まれたヨナは大きな魚に呑み込まれました。魚のお腹の中で何とか命をながらえていたヨナの祈りがここに記されています。

神に背いたために魚のお腹の中に身をおくことになったヨナには、神の前に何の申し開きもできませんでした。自らに絶望するしかなかったのです。暗闇の中でなおも希望を見出すことができるとするなら、それは神の憐れみにすがるしかありませんでした。最も低いところまで下ったとき、真剣に主を見上げる思いが生まれたのです。絶望の淵で主に祈りをささげたのです。そして主はヨナのどん底からの叫びを聞いてくださいました。ヨナは驚きをもってそのことを報告します。「わたしは陰府の腹の中から叫ぶと、あなたはわたしの声を聞かれた」(2)。ヨナはここで、預言者として最も大切なことを悟りました。「救は主にある」と。どんな人も自分で自分を救うことなどできません。ただ主の憐れみだけが人を救うのです。そして自分に絶望した者だけが、この真理に到達します。陰府の淵はこの希望への入り口でした。最も低い所に下ったからこそ、ヨナは救いを与える主を発見したのです。自らの罪深さに絶望し、神から完全に引き離されてしまったように感じるとき、そこで主を仰ぐようではありませんか。救いは主の御手にあるからです。

## 神からの賜物としての義

詩篇143篇

あなたのしもべのさばきにたずさわらないでください。生ける者はひとりもみ前に義とされないので。(2)

この詩は「七つの悔い改めの詩篇」の一つとされ、ルターはこの詩をパウロ的詩篇と呼んでいます。この詩の中に、パウロの書簡に見られるような義の概念が出てくるからです。

主イエスが最も厳しい断罪の言葉を語ったのは律法学者やパリサイ人たちに対してでした。彼らは旧約の律法を熱心に守ることによって自分たちの正しき、義を神と人の前に主張したからです。けれども彼らの本当の姿は、自分たちの醜い部分には目をふさぎ、良い行いをもつて罪を覆い隠そうとしているに過ぎませんでした。詩人はここで、「生ける者はひとりもみ前に義とされないからです」と告白しています。正しい行いに励むこと自体はとても素晴らしいことです。けれども間違つてはならないことは、それによって神の前に義と認められるわけではないということです。誰も自分の力で義を獲得することはできません。ただキリストの一方的な憐れみのゆえに、義を与えていただくしか道はないのです。「主よ、み名のために、わたしを生かし、あなたの義によって、わたしを悩みから救い出してください」(11)。自らの正しきのゆえではなく、神の憐れみのゆえに義なる者と認めていただいたに過ぎない自分であることが本当に分かったなら、誰ひとりとして自分を誇るなど出来なくなるはずです。わたしたちはお互いに赦された罪人に過ぎないので。



## 神による報復

オバデヤ書

主の日が万国の民に臨むのは近い。あなたがしたようにあなたもされる。  
あなたの報いはあなたのこうべに帰する。(15)

オバデヤ書はイスラエルに隣接するエドムの国に対する神の審きを記した書で、旧約聖書の中で最も短い書となっています。エドムはヤコブの双子の兄エサウの子孫で、エドム人はヤコブの子孫であるイスラエルの民を常に悩ます存在でした。

この預言が語られたのは、エルサレムがバビロンによって占領された後のことと思われる。エルサレムが滅亡したとき、兄弟国であるエドムはそれを喜び、助けるどころか自分たちもエルサレムを荒らしたのです(13, 14)。このようなエドムの態度に対して、神ご自身が彼らに罰を与えると言われたのです。「あなたがしたようにあなたもされる。あなたの報いはあなたのこうべに帰する」。主はここで、背きの罪のために神に打たれて滅ぼされたイスラエルについて、「わが民」(13)と呼んでおられます。主にとってイスラエルがご自分の民であることに変わりはなく、他の国々がイスラエルに危害を加えることを見過ごしにはされないのです。ご自分の民に代わつて、主自ら彼らに報復すると宣言されました。

わたしたちも神を信じない周りの人々からその信仰のゆえに嫌がらせを受けたりすることがあるでしょう。そのとき、主は黙って見ておられる方ではありません。「わが民」への攻撃は主ご自身への攻撃と受け止め、主がその悪に報いられるのです。

## 主を離れる預言者

ヨナ書1章

ヨナは主の前を離れてタルシシへのがれようと、立ってヨツパに下つて行った。ところがちやうど、タルシシへ行く船があつたので、……主の前を離れて、人々と共にタルシシへ行くこうと船に乗った。(3)

主はアッシリアの都ニネベの町に行つて神の言葉を語るようにと預言者ヨナに命じられました。異邦人であり、イスラエルの敵である人々のもとに行けと言われるのです。

ところがヨナは、それを聞くとニネベとは全く反対方向にあるタルシシに向けて出発します。聖書はその行為を「ヨナは主の前を離れて」と記します。主の御心と反対の道を進むということは、主の御前を離れていくことを意味しました。人は主の声が届かないところに逃げ込むことにより、神に背いている自分の存在を隠そうとします。ヨナが主の前を離れて反対方向へ向かったことを「立ってヨツパに下つて行った」とあります。それは罪へと下つていく行為でした。ヨナは船底にまで下り、ついには海の底にまで下ります。主の前を離れるとき、神の言葉を語る預言者でさえも、坂を転がり落ちるようになります。主がその転落をどどめてくださらなければ、わたしたちは罪へと下る道を引き返すことなどできないのです。

ヨナの物語はわたしたち一人ひとりの物語でもあります。それは同時に、罪に下る者たちをどこまでも追いかけて行かれる主の憐れみの物語でもあります。主のまなざしは、海底へと下つていったヨナにも届いていたのです。

## 勝利を与えてくださる主

詩篇 144 篇

わが岩なる主はほむべきかな。主は、いくさすることをわが手に教え、戦うことをわが指に教えられます。(1)

「ダビデの歌」という表題が付いている詩の中には、ダビデ自身が作ったものではなく、後世の人々がダビデの生涯や信仰を思い起こしながら作ったものが多くあります。

この詩の前半は同じダビデの歌である一八篇や八篇から取られた言い回しが多く使われています。主をほめたたえた後、「主は、いくさすることをわが手に教え、戦うことをわが指に教えられます」と詩人は語ります。多くの敵との戦いにおいて、主は常にいかに戦うべきかを教え、勝利を与えてくださったと振り返るのです。ある人々はこの部分はダビデがゴリヤテと戦ったときのことを背景にしているのではないかと考えます。巨人ゴリヤテを前に、少年ダビデはあまりにも無力でした。けれども主はそのダビデの手に一つの石を与え、それをもつてゴリヤテを打ち倒すように教えられたのです。ダビデが持っていたものは、主なる神の力をどこまでも信じる信仰でした。その信仰のゆえに、ダビデは敵を退けることができました。自らの手や指を眺めながら、勝利を与えてくださった主をほめたたえました。

わたしたちの人生にも多くの戦いがあり、途方に暮れるようなことがあります。けれども主は、主の力を信じて寄り頼む者たちに対してふさわしい戦い方を教えてくださいます。キリスト・イエスの兵卒として、主の力に寄り頼む者たちでありたいと願います。

## ヨナの再出発

ヨナ書3章

時に主の言葉は再びヨナに臨んで言った、「立って、あの大きな町ニネベに行き、あなたに命じる言葉をこれに伝えよ」。(1、2)

大きな魚のお腹の中で悔い改めの祈りをささげたヨナに対して、主は魚に命じてヨナを陸地に吐き出させました。ヨナが生きているのも死ぬのも主の御手にあつたのです。

そのヨナに向かつて主はもう一度同じ命令を与えられました。「立って、あの大きな町ニネベに行き、あなたに命じる言葉をこれに伝えよ」。一度は神の命令を退け、自ら主の働きには不適合であることを証明したようなヨナに主は声をかけられたのです。人間の世界ならば、「あの人はダメだ」とレッテルを張られてしまい、一度と大きな働きに用いられることもないでしょう。ところが主は、そのような失格者を見捨てず、やり直しの機会を与えられたのです。全く不適合な者を用いようとするのです。ヨナが神の命令に従ったとき、ニネベの人々の中に大きな悔い改めが起こり、王をも巻き込んだの大リバイバルとなりました。ヨナに能力があつたからではありません。主の御手に自らを委ねて献身した器を主が豊かに用いてくださったからです。自らの無力さをわきまえつつも、尻込みすることなく勇気をもつて主に従っていくとき、そこに驚くような主のみわざが起こるのです。

わたしたちも、主の働きのためには不相应な者たちです。けれども主は、わたしたちを主の働きのために用いてくださいます。この主の招きにお応えしようではありませんか。

## 滅びる者を惜しむ神

ヨナ書4章

ましてわたしは十二万あまりの、右左をわきまえない人々と、あまたの家畜とのいるこの大きな町ニネベを、惜しまないでいられようか。(11)

ヨナの宣教によつてニネベの人々が悔い改めたのを受けて、主はニネベの町を滅ぼすことを思いとどまられました。ところがヨナは自分の預言したことが成就しないことを不快とし、憤りをもつて神に抗議します。何と独善的で狭い心でしょう。

ヨナは町の成り行きを見守ろうとして町が見渡せるところに座します。主は暑さに苦しむヨナのためにとうごまの木を与えられました。ヨナは日陰を与えてくれるその木を大変喜びましたが、次の日になるとその木は枯れていました。するとヨナは非常に落胆し、死を願いつつ「わたしは怒りのあまり狂い死にそうです」(9)と主に訴えました。主はヨナを諭すように語られました。「あなたは勞せず、育てず、一夜に生じて、一夜に滅びたこのとうごまをさえ、惜しんでいる。ましてわたしは……」と。ヨナがたつた一本の木を惜しむのであれば、主がニネベの町の人々が滅びるのを惜しむのは当たり前ではないかというのです。全世界の主なる神は、罪人たちが滅びるのを喜ばれる方ではありません。どんな国の人々であつても、罪のゆえに滅びることを決して望まず、救いを願つておられるのです。

わたしたちの心の内にもヨナがいませんか。わたしたちはもともと、主が「惜しい」と思つてくださったからこそ救い出された者たちであることを思い出そつではありませんか。

## 審判者として下られる神

ミカ書1章

すべての国々の民よ。聞け。地と、それに満ちるものよ。耳を傾けよ。神である主は、あなたにわたのうちに証人となり、主はその聖なる宮から来て証人となる。(2/新改訳)

預言者ミカはホセア、イザヤなどと同時代の預言者です。当時、北王国イスラエルでは王たちが次々と暗殺されて政権が交代し、南王国ユダにおいては名君ウジヤが死んで国を力を失い、アッシリアによる侵略という危機が迫っていた時代でした。

そのような危機が迫る中、ミカは主の言葉を人々に語りました。迫り来るアッシリアの災いは神の審判の表れであると伝えたのです。偶像礼拝に陥っている彼らの罪のゆえに、主はアッシリア軍を用いて審きを行おうとしておられました。ここでは主自ら証人として法廷に出廷されると語られます。「神である主は、あなたがたのうちで証人となり、主はその聖なる宮から来て証人となる」。このとき主は、神の民を弁護するための証人として来られるではありません。逆に彼らの罪を明らかにするための証人となられるというのです。なんと悲しいことでしょう。主が神の民に有罪を宣告するための証人になられるとは。それほどまでに、彼らの罪はもはや言い逃れできないことをミカは告げています。彼らに残されていた道は、ただ罪を悔い改めるだけでした。

主イエスが再び地上においでになるとき、わたしたちを罪に定める審き主として迎えるのではなく、救いを完成してくださる救い主として喜びをもつてお迎えしたいものです。

## キリスト誕生の預言

ミカ書5章

しかしベツレヘム・エフラタよ、あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、イスラエルを治める者があなたのうちからわたしのためになる。その出るのは昔から、いにしえの日からである。(2)

アツスリヤによつて都エルサレムが包囲されるといふ危機に際して、預言者ミカは、ダビデ王の故郷であるベツレヘムから新しいリーダーが登場するであろうと預言しました。

「しかしベツレヘム・エフラタよ、あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、イスラエルを治める者があなたのうちからわたしのためになる」。そのリーダーは羊飼いだつたダビデ王に似て、「立つてその群れを養い、彼らを安らかにおらせる」(4)と、良き牧者となることが告げられています。このミカの預言は、主イエスの誕生によつて成就しました。東の国の博士たちがユダヤ人の新しい王を礼拝しようとするとき、律法学者たちはミカのこの預言を引用して、メシヤがベツレヘムで生まれたことを告げました。この真の王は、アツスリヤに包囲されているときにこの預言を聞いたエルサレムの住民と同じように、様々な苦しみに取り囲まれて苦しんでいる人々に解放をもたらすために神のもとから遣わされました。さらにダビデの子孫として、迷える羊たちを養う良き牧者となつてくださいました。ミカ自身が予想もしていなかつた形で預言が成就したのです。

まもなくアドベントに入ります。ベツレヘムに誕生した主イエスがわたしたちをも治める王となつてくださるように、心の戸を開いて主イエスをお迎えしようではありませんか。

## 罪人の計らいと神の計画

ミカ書2章

見よ、わたしはこのやからにむかつて災を下そうと計る。あなたがたはその首をこれから、はずすことはできない。また、まっすぐに立つて歩くことはできない。これは災の時だからである。(3)

ミカの時代、ユダ王国は表面的には栄えていましたが、指導者たちは権力を悪用して私腹を肥やし、そのために社会構造が崩壊しかけていました。貧しい者たちから土地を奪い取るにより、社会の底辺の人々はいよいよ貧しくなり、奴隷となつていったのです。

ミカはそのような悪辣な指導者たちに神の審きが下ることを告げます。主は彼らの不義を見過ごしにはされなかつたのです。権力者たちが寢床で悪しき計画を立てている一方で、主は彼らの審きを計画しておられたというのです。「見よ、わたしはこのやからにむかつて災を下そうと計る」。すなわち主はアツスリヤ帝国を用いて、彼らが貧しい人々にしたのと同じことを彼らの上になされるのです。そのときの彼らの嘆きの声が記されています。「われわれの田畑はわれわれを捕えた者の間に分け与えられる」(4)。主は彼らが犯した罪にふさわしい刑罰を与えようと計画しておられました。この主の審きに対して、彼らは不平を言うことなどできません。それは彼ら自身が他の人々に対して計画したことの報いを受けているに過ぎなかつたからです。

主の審きは、わたしたちの罪に対する当然の報いであることを忘れてはなりません。わたしたちがその審きから逃れることが出来るのは、ただ主の憐れみによるのです。

## 見せかけの主への信頼

ミカ書3章

しかもなお彼らは主に寄り頼んで、「主はわれわれの中におられるのではないか、だから災はわれわれに臨むことがない」と言う。(11)

ミカが預言していた時代の世の中は正義が完全に失われていて、全ては富を有している者たちに都合の良いように動く社会となっていました。

正義を社会に示すはずの法廷では、裁判官たちが金持ちの望むような判決を下し、偽預言者たちは多額の謝礼を払った者たちに対して彼らが喜ぶような言葉を聞かせていました。彼らの不真実は人間に対してだけでなく、神に対しても同様でした。裁判官、祭司、預言者たちが私腹を肥やすために不義を働きながら、なお平然と主に寄り頼んで、「主はわれわれの中におられるではないか、だから災はわれわれに臨むことがない」と言ってはばからなかったのです。彼らの霊的な感覚がいかに鈍っていたかがよく分かります。自分たちの罪には目をつぶりながら、あたかも信仰深いかのような言葉を平気で口にするのできる感覚、主への恐れというものを完全に失ってしまった彼らの実態を表しています。そしてこの病いは、現代の教会の中にも入り込んでいるのではないのでしょうか。主が求めておられることは、真実をもつて主の前に出ることなのです。

見せかけの主への信頼は、いざという時には何の役にも立ちません。わたしたちの内から主への不真実を取り除き、偽りのない心で主に向かおうではありませんか。

## 審きの後の回復

ミカ書4章

シオンの娘よ、産婦のように苦しんでうめけ。あなたは今、町を出て野にやどり、バビロンに行かなければならない。その所でああなたは救われる。主はその所でああなたを敵の手からあがなわれる。(10)

旧約の預言者たちは、人々が平安だと思つて気ままに生活している時代には、民衆が予想もできないような厳しい主による審きの言葉を語りました。

しかし、主の審きを受けて苦しみの中に絶望している人々に対しては、主の憐れみによる回復があることを力強く語りました。この章でミカはまさに、主の審きを受けて悲惨な状況に陥り、望みを失っていた民に向かつて回復を預言しました。イスラエルの民は主の審きを受けてバビロンに行かなければならないことが告げられます。しかしそれで終わりではありません。「その所でああなたは救われる。主はその所でああなたを敵の手からあがなわれる」とミカは語ります。大きな苦しみの中にいるとき、人はそこでなお希望を見出して生きることが難しくなります。そのときこそ、主の言葉を語る預言者が活躍する時です。真の預言者は偽りの平安を告げるのではなく、審きの向こうに確かな救いがあることを約束するのです。現実の状況に心を奪われて、暗闇の向こうに光があることを人々が信じられなくなっているとき、主の言葉によつて確かな希望を語る事ができるのです。

わたしたちがどんな苦境に立たされても、なお希望をもつて生きることができるのは、真実な主の言葉によつて将来に光を見出すことが出来ているからです。

## 報復される神

ナホム書1章

主はねたみ、かつあだを報いる神、主はあだを報いる者、また憤る者、主はおのがあだに報復し、おのが敵に対して憤りをいだく。(2)

ナホム書はアツスリヤの都ニネベの滅亡に関する預言です。アツスリヤは北王国イスラエルを滅ぼし、南王国ユダをも脅かしていました。勢力が絶頂にある強大国アツスリヤもやがて滅亡するとナホムは告げたのです。

アツスリヤが滅ぼされるのは主が激しい怒りをもつて彼らの罪に報いられるからであるとナホムは語ります。わたしたち日本人の感覚からすると、憐れみと慈しみに満ちた愛の神は怒ったり報復したりなどしないはずだと思ってしまう。けれども聖書は義なる神は罪に対しては必ず報いを与えられると語っています。その一方で、「主は怒ることおそく」(3)とも紹介されています。ニネベの町の人々はまさにそのことを経験しました。かつて預言者ヨナが神の審きを語ったとき、人々が心から悔い改めたため、主は怒りをとどめられました。けれども人々の悔い改めは長続きしませんでした。このため、主は彼らに対して決定的な審きが下ることを告げられたのです。主は悔い改める者たちに対しては怒りをとどめられる方ですが、背き続ける者たちにはその罪に報いる方なのです。

神の怒りが遅いことをいいことに、神をあなどつてはなりません。「主はあだを報いる者」、それが聖書が語る義なる神であることを心に留めたいものです。

## 主が求めておられること

ミカ書6章

主のあなたに求められることは、ただ公義をおこない、いつくしみを愛し、へりくだってあなたの神と共に歩むことではないか。(8)

この章ではイスラエルの民と主とのゆがんだ関係があたかも法廷で論じられるかのよう

に語られています。イスラエルの民は主に對する奉仕を重荷のように感じ、あたかも主が無

理な要求を突きつけておられるかのように不満をもちます。

これに対して主は、「わが民よ、わたしはあなたに何をなしたか、何によつてあなたを疲れさせたか、わたしに答えよ」(3)と尋ねます。民の側に正当な答えなどありません。主は重荷を負わせるどころか、彼らを奴隷となつていたエジプトから救い出し、憐れみをもつて導き続けて来られたからです。そこで民は、何をもちて主との関係を正すことができるかと質問します。数多くの雄羊をささげるべきか、それとも自分たちの長子をささげるべきかと。ミカは、形を整えることばかりに心を用いて内実を失っている彼らの信仰に「ノー」を宣言します。「主のあなたに求められることは、ただ公義をおこない、いつくしみを愛し、へりくだつてあなたの神と共に歩むことではないか」。真実な心で日々主と共に歩むことこそ、主が神の民に求めておられることでした。人格的な命の交わりを主は求めておられるのです。同じように、主がわたしたちに求めておられることは、どれだけ多くの奉仕をしたかではなく、生きておられる主を仰ぎつつ、主と共に歩むことです。

## なお主に望みをおいて

ミカ書7章

しかし、わたしは主を仰ぎ見、わが救の神を待つ。わが神はわたしの願いを聞かれる。(7)

ミカはエルサレムの現状を嘆きます。正直者はいなくなり、人はみな他人を騙そうと計ります。隣人も友人も、家族の者たちまで信用できないような社会になっていたのです。

このような絶望的な現実を前にしても、ミカは望みを失うことはありませんでした。主に目を注いだのです。「しかし、わたしは主を仰ぎ見、わが救の神を待つ。わが神はわたしの願いを聞かれる」。誰一人として信用できる存在が地上にはいなくなりましたが、主なる神だけは決して変わることはないお方であることを知っていたのです。ミカは本書の最後にこのように語ります。「昔からわれわれの先祖たちに誓われたように、真実をヤコブに示し、いつくしみをアブラハムに示される」(20)。ミカにとつて最後の砦は主の「真実」でした。神に背いて罪に陥つた民に対して、なおも変わらぬ愛と憐れみを注ごうとうする主の真実が、絶望の淵でなお希望を与えたのです。主が真実な方でいてくださるとは、何と大きな慰めでしょうか。だからこそ、わたしたちはミカと共に次のように告白することができます。「しかし、わたしは主を仰ぎ見、わが救の神を待つ。わが神はわたしの願いを聞かれる」と。人々の不真実に心がかき乱されるようなとき、わたしたちは決して変わることはない真実なる主を仰ぎ見、主が立ち上がつてくださるのを待ち望もうではありませんか。

## 主を呼ぼう

詩篇145篇

すべて主を呼ぶ者、誠をもつて主を呼ぶ者に主は近いのです。(18)

この詩はいわゆる「いろは歌」形式で、各節の最初の文字がヘブル語のアルファベット順になつています。真の王である神が支配される神の国の様子を理想的に描いています。

詩人がほめたたえる主は、恵みと憐れみに満ち、必要な日々の糧を与えてくださるお方です。「あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます」(15)。何よりも大きな恵みは、主の助けを呼び求める私たちの近くに主はいてくださることです。「すべて主を呼ぶ者、誠をもつて主を呼ぶ者に主は近いのです」。わたしたちが真実な思いで主を呼び求めるとき、主はわたしたちの近くにおられ、その叫びに耳を傾けていてくださると約束されています。これこそ主の民とされた者たちの特権です。この真理はすでにモーセによつて語られていました。「われわれの神、主は、われわれが呼び求める時、つねにわれわれに近くおられる。いずれの大いなる国民に、このように近くおる神があるであろうか」(申命記四7)。

わたしたちの近くにおられる主を呼び求める礼拝の日を迎えました。兄弟姉妹とともに、真実をもつて主を呼ぶ日です。大きな問題が頭上を覆い、主が遠くに行つてしまわれたように感じるときも、この約束の言葉を信じて主を呼ぼうではありませんか。「すべて主を呼ぶ者、誠をもつて主を呼ぶ者に主は近いのです」。

## ニネベに対する攻撃

ナホム書2章

わたしはあなたの戦車を焼いて煙にする。つるぎはあなたの若いししを滅ぼす。わたしはまた、あなたの獲物を地から断つ。あなたの使者の声は重ねて聞かれない。(13)

絶大な力を誇っていたアッスリヤも報復される時が来るとナホムは預言しましたが、この章では都ニネベが敵軍によって攻撃される様子が描かれています。

そのニネベの町は、巨大な要塞設備に守られた都市で、人々は自分たちの町が減ぼされることなど考えられなかったようです。しかし、いかに堅固な町も主の審判を逃れることなどできません。誰も立ち向かうことなど出来ないように思われたニネベの町に対して、「見よ、わたしはあなたに臨む」(13)と主は宣言されました。神に背いて暴虐を繰り返す者たちは、必ず神による報いを受けることになるのです。そのとき、獅子のように何ものをも恐れずにこの世に君臨していた者たちが、死の世界へと葬り去られることとなります。歴史の真の支配者である主が生きておられるからです。このお方の前には、どんなに力を持っている者たちも対抗することはできません。聖書は歴史の事実を記すことを通して、この世の力を絶対視するのではなく、それらを凌駕する神に目を注ぎ、神をこそ恐れるべきことを教えています。

世の権力者たちが自分たちの力を誇る時、その力の大きさに心を奪われてはなりません。彼らをも支配しておられる主なる神を畏れ敬う者たちでありたいと願います。

1. 「礼拝に生きる神の民」の標語のもと、礼拝によって生かされる教会であるように
2. 定期集会の祝福のために
  - ・礼 拝 (日・午前 10:30) インターネットをとおしても、私たちが真実な礼拝をささげ続けることができるように
  - ・祈 禱 会 (水・午後 7:30) Zoom を用いての祈禱会のために
  - ・木曜祈禱会 (木・午前 10:30) YouTube のライブ配信のために
3. 私たちの目ざす教会ー「キリストがあらわされる教会」が実現していくように
  - ① (礼 拝) 『イエスは主』と告白する教会
  - ② (宣 教) 「キリストの香りを放つ教会」
  - ③ (交わり) 「主を中心とした交わりに生きる教会」
4. 長期間にわたる会堂借入金の返済のために
  - ・教会債 (毎年2月、10年間)
5. 教会学校の祝福のために
  - ・Zoom を用いてのCS が守られるように
  - ・子どもたちに信仰が確実に継承されていくように
6. 救われる方が起こされるように
  - ・家族、親族、友人の救いのため、求道中の方々の救いのために
7. 病気や弱さを覚えている方々の回復のために
  - ・工藤絢子姉 (入院)、西内襄子姉、伊藤姉、齋藤美子姉、山本姉、横道兄、齋藤兄、そのほかの方々のため
  - ・大前信夫師のために
8. 新型コロナウイルスの世界的な感染が早く収束するように。
  - ・礼拝のライブ配信の働きが守られ、用いられるように
  - ・教会の皆さんが感染から守られますように
  - ・医療従事者をはじめ、対応に当たっている方々の働きのために
9. 東北教区の諸教会のために (弘前、三沢、築館、福島、宮古)
10. 第10回全国信徒大会 (11/23開催) の祝福のために
11. ロシアによるウクライナ侵攻が停止・解決するように



すべてあなたを見るものは、あなたを避けて逃げ去って言う、「二ネベは滅びた」と。だれがこのために嘆こう。わたしはどこから彼女を慰める者を、尋ね出し得よう。(7)

この章もアッスリヤの都二ネベの滅亡について記されています。馬や戦車の走る音、人々が剣で殺され、死体が山となつて異臭を放っている様子が生々しく描かれています。

この二ネベの滅亡について、古代エジプトで最も栄えた都市の一つテーベが比較して語られています。「あなたはテーベにまさっているか」(8)。テーベは非常に栄え、地理的・軍事的・政治的にも他国によつて滅ぼされるとは考えられませんでした。ところがそのテーベも滅びたのです。しかも、当のアッスリヤがテーベまで進軍し、虐殺と略奪を行ったのです。そして今、アッスリヤがテーベに行ったのと同じことが自分たちに臨むと預言されました。真の神を恐れることなく、自分たちをこの世の神のように思つて振る舞う者たちは、やがては自分たちが行ってきたことと同じ報いを受けることになります。主が彼らの罪に報いられるからです。これは現代のわたしたちに対する警告でもあります。自分たちの力を他国に対して暴虐を行うために用いるとするなら、それらの国々に代わつて主が報いを与えられます。義なる神は、権勢を誇つて不義を行う者たちに対して正しい審きをなさるのです。

わたしたちに与えられている力を、他者を抑圧するために用いるのではなく、他の人々に仕え、主の栄光を現すために用いるわたしたちでありたいものです。

ホセアから最後のマラキまでの12ある預言書は、まとめて「小預言書」と呼ばれます。

そのうちゼパニヤまでの9つはバビロン捕囚前の預言で、北王国イスラエルや南王国ユダ、さらには諸外国に対して、神に反逆を続ける罪を悔い改め、主に立ち帰るように語りまします。もし悔い改めないで主に背き続けるならば、厳しい主の審きが臨むことになると預言しました。

また、最後のハガイ、ゼカリヤ、マラキの3つは捕囚後の預言です。バビロンから帰国した民が、神殿を中心にした真の礼拝を回復していくようにと預言者たちは主の言葉を語っています。

これらの預言書の特徴の一つは、「主の日」あるいは「その日」という表現を用いて、やがて訪れる特別な日、すなわち主が歴史に介入されてそのみわざをなさる日のことを語っていることです。預言者たちは近い将来に起こるであろう主による審きの日(あるいは救いの日)について語っていますが、彼らの預言は近い将来の出来事だけに留まらず、キリスト来臨の日について、さらには世の終わりにおける審きの日についても指し示しています。

これを読む私たちは、預言者たちが直接語っていることの意味を理解すると同時に、預言者たちも気づかないで語っていた終わりの日に起こるであろう出来事の意味を読み取っていくことが大切です。